

文献紹介
資料紹介
〈第4回〉

アーネスト・ヘンリー・ウイルソン 日本の針葉樹

山本 秀雄

ウイルソン博士と屋久島

屋久杉の大株（ウイルソン株）は島の内外を問わず、多くの人に親しまれている。

島民にあっては幼少から岳参り行事などによって周知のこと、島外からの方は屋久島のシンボルとして、又観光の面でも多く現地に、実物に接しておられよう。

なぜこの切株が「ウイルソン株」と固有名詞をもって呼ばれるようになったか、それは内務省の囑託として、屋久島の天然紀念物調査をされた田代善太郎氏の報告書（大正十二年六月）に明解な答が出ている。ウイルソン株の名を得たるは、ウイルソン氏の宣伝によりて世に知られるが為なり」と。これを文献に見るとき「田代善太郎日記」（大正十一年十二月八日）が私の知る初出で、又前記「屋久島の天然紀念物調査報告」にウイルソン株の文字入り写真を見ることが出来る。ウイルソン博士は、大株の紹介者に止まらず、屋久島の環境保全と観光に光を当て、島のイメージアップと経済浮揚に果たした役割は大きく、その功績は計り知れないものがある。屋久島の恩人である。今回はそのウイルソン博士の論文『日本の針葉樹』を取り上げるが、論文は序文と本文からなり、四百字詰二十五枚に及ぶものである。その中から触りの一部だけ紹介し、あとを捨て置くことは如何にも心

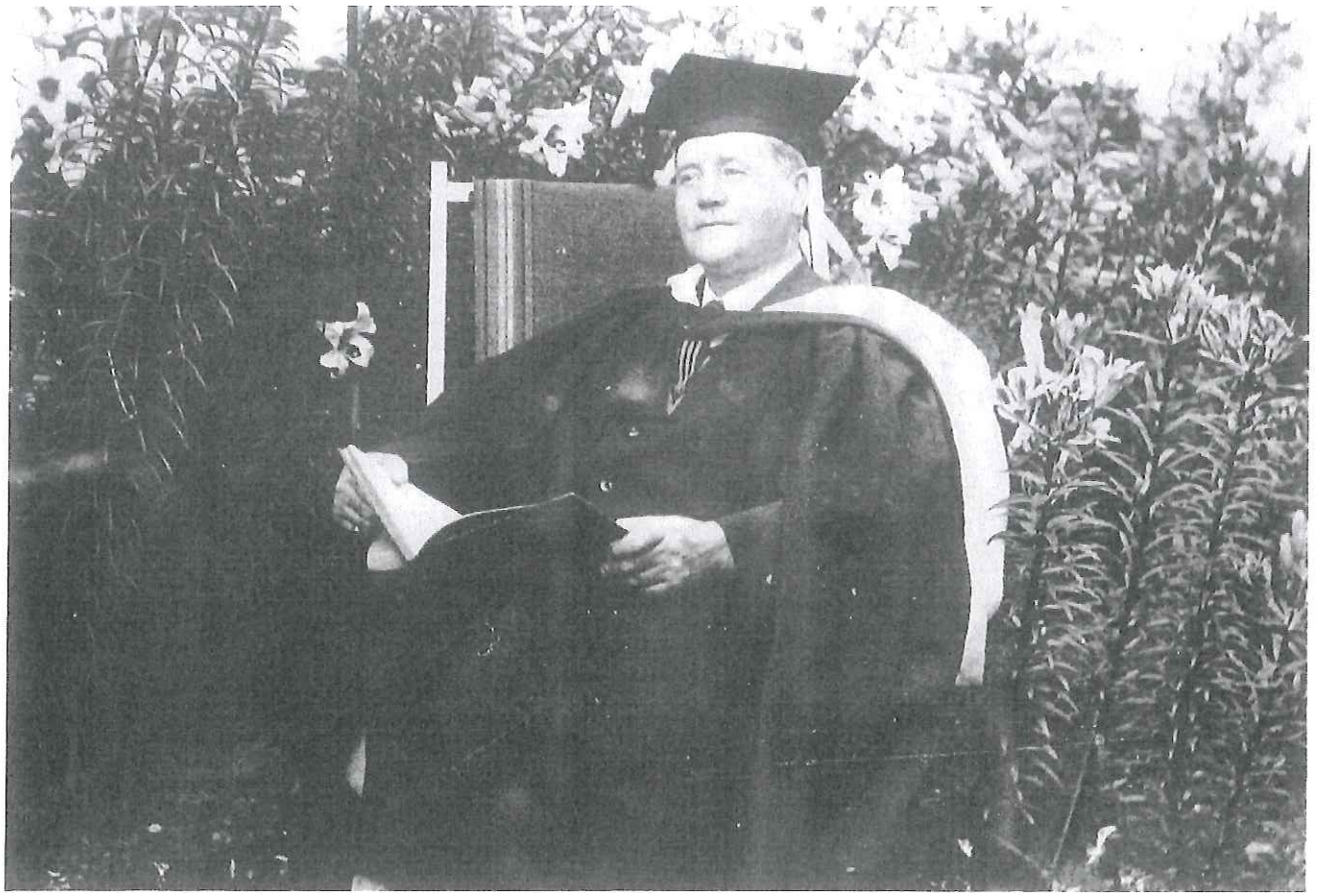
残りであり、惜しい文章である。従って触りだけに止まらず、せめて屋久島に関係する本文の全てを掲載出来るよう編集者の厚意を得たことに感謝したい。

アーネスト・ヘンリー・ウイルソン博士は、一八七六年イギリスに生れ、一九三〇年アメリカのマサチューセッツ州で自動車事故のため、五十四歳で世を去った。ハーバード大学の博士号をもち、米国学士院会員、ボストン園芸会長などを努め、園芸界の中心人物であったと伝記は伝えている。

博士の屋久島来島は大正三年（一九一四）二月十七日、桜島爆発の余燼がまだ収まらない時であった。第一回目の、しかも日本の調査の第一歩が実に屋久島から始まった。この意味は非常に大きなものではないか。私にとって日本国中で最も興味を深く、かつ珍しい森林は屋久島のここである。又、森の床、そして木の幹が法外に多数の隠花植物を擁護している。他のどこでも、中国西部の有名なオメイ山でさえも、このような豊富な植物を見たことがない。など行間にもその事は知られよう。

博士の来日の目的は日本の桜、つつじ、針葉樹の研究（台湾博物学会報二二卷一一三号）で、二回に亘って日本の南島から四国、北は樺太に足跡を印し、採集の種子、腊葉は多種にわたり、帰国後も標本が送られていたことを「田代善太郎日記」が教えてくれる。それ等の標本は今もハーバード大学植物標本室（Harvard University Herbarium）

腊葉 圧して乾した草木の枝葉などの標本。おしば。腊は薄く切つて並べ乾した肉の意。



に保管されているという。

最後にこの論文(コピー)は昭和五十四年屋久島を訪ねた、ハーバード大学の女子学生 Betsy Pernotto が、現上屋久町社会教育課長大山純一氏の要請に応じて贈られたもので、翻訳は詩人山尾三省氏が担当されたことを附記して、両氏に深く感謝の意を表したい。

ちなみにウイルソン株は屋久島東事業区三十三林班・標高一千百メートルの地点・小杉谷の通称八左エ門山にある屋久杉の切株である。天正十四年(一五八六)豊臣秀吉が京都方広寺の建築用材として、島津家久に命じて、島津忠長・伊集院忠棟の両家老を派遣して、楠川の牧五郎七他七名の木挽に伐採をさせたものと伝えられている。形状は

根周り 三十二・五メートル
直径 四メートル

切口高さ 四メートル

樹齡推定 三千年

洞底面積 四十平方メートル

空洞・洞底を清泉が流れる

洞中に

彦火火出見命

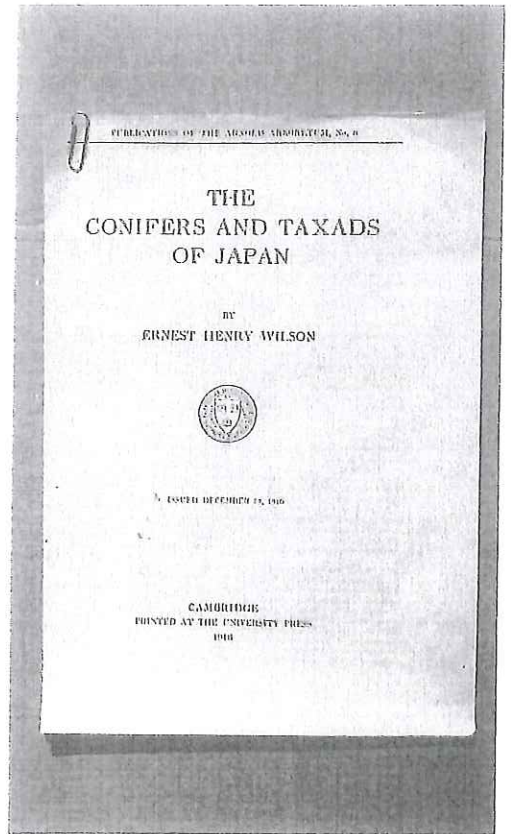
久久能智神

二神を祭神とする木魂神社が祀られている。

ウイルソン株の資料

- 1 大日本古文書(島津家文書) 屋久島置目
- 2 鹿児島県史(二卷)Ⅱ(昭和十四年) 方広寺用材
- 3 鹿児島県屋久島の天然紀念物調査報告Ⅱ(大正十五年)
- 4 台湾博物学会報(第二卷一一三三号)Ⅱ(昭和六年)
- 5 上屋久町々報(一六二二号)外Ⅱ(昭和四十二年)
- 6 日本気象学会誌(天候二三三三号)Ⅱ(昭和四十三年)
- 7 熊本管林局林友(暖帯林七月号)Ⅱ(昭和四十四年)
- 8 田代善太郎日記(大正篇)Ⅱ(昭和四十七年)

方広寺 豊臣秀吉が創建した天台宗の寺院。秀吉はここに奈良の大仏にも比すべき木製金漆塗の座像大仏(約18m)を安置したが地震のため破壊された。その後、秀頼が再建、銅像大仏(約19m)を納めた。その供養の際、巨鐘の鐘銘「国家安康」の語に家康がいいがかりをつけて大阪の陣が起り、豊臣氏の滅亡となった。



日本の針葉樹

私は、一九一四年の二月初旬に日本に到着した。調査旅行は、九州の鹿児島から南ほぼ九十マイルに位置する屋久島の森へ歩をすめることから始まった。もの本によれば、普通屋久島は琉球列島の仲間に入れられているが、これは正確な指摘ではない。屋久島はほんの小さな島であるが、日本列島本土の最南端に位置することのみならず、日本の植物相の南限を示しているという点において特別の興味を喚起する島である。私の旅は、H・シラサワ博士が便宜をはかって下さったおかげで大変容易なものとなった。博士は、その管轄内に屋久島を含んでいる鹿児島営林局の局長であるナイトウ博士に紹介状を書いて下さった。ナイトウ博士はまた、誠に感謝すべきことに、彼の部下であるミヨシ氏という人物を、私と共に行動すべく選んで下さり、私は自分が訪ねたいと思う所なら何処へでも彼を伴うことが出来ることになったのである。ミヨシ氏は東京の農林専門学校（現農学博士課程）のホング教授の元に学び、そこを卒業したばかりの人物で、やがて旅の道連れとして最上の魅力と情熱を持った人であることが判った。

屋久島においては、島内の営林署の人達が出来ることをしてくれた。もしもこれらの協力がなかったならば、屋久島の森を研究することは殆ど不可能であ

あったろう。というのは、まず道がない。森林保安官が歩く丸太越えのケモノ道しかない。次には、山中では同じく森林保安官達が時々使用する粗末な小屋の他には、宿泊施設のようなものが一切ないのである。

屋久島は海面から垂直に突き出した花崗岩のかたまりの島である。山には突出部が多く、その最高峰は宮之浦岳と呼ばれ、海拔一九二八メートルである。海岸線から百メートルまでの地帯は、海岸性の草原地であり、小さな部落が点在し、あちらこちらに耕地も見られる。所々にぼつんと繁っている木は主としてクロマツであり、川の流れに沿って種々のかん木、バナナ、ヘゴ、その他の雑多な木々が繁茂している。さらに登って標高二百五十メートルくらいの地帯までは、常緑樹を主とした混合林の細長いベルトが見られる。この地帯の森林ではシイが目立って多く、スギが植林されている。この地帯は島民の民有林になっており、ここから上が全島国有保護林になっている。宮之浦岳の頂上は、ササ、ヤクシマシヤクナゲ、ミヤマビヤクシン、雑多な灌木におおわれているそうであるが、私の訪ねた季節にはすべて雪におおわれており、観察することが出来なかった。

この島の森林状況は、その九十九パーセントが常緑樹であり、その内六十パーセントが針葉樹である。スギは全森林の五十パーセントを形成している。その他の針葉樹としては、ツガ、モミ、散在するヒノキ、カヤ等で、残りの十パーセントを占めている。また、常緑広葉樹については、ヤマグルマ、イスノキ、ツバキ、サザンカ等が三十パーセントを占め、ユズリハ、イスノキ、ヒメユズリハ、オガタマノキ、ヤマモモ、さまざまのカシ類、モチノキ類、クスノキ類が残りの九パーセントを占めている。落葉樹である残り一パーセントの半分をヒメシヤラが占め、さらにその残りの〇・五パーセントをハリギリ、ハマセンダン、アブラギリ、リョウブ、カエデの類、その他、私が認め得なかった植物が占めている。主な下生え植物は、ミヤマシキミ、ヒサカキ、アリドウシ、アセビ、サクラツツジ、サツキ、センリョウ、カラタチバナ、モクダチバナ、シキミ、ユズリハ、カクレミノ等がある。終わりの三つの植物は灌木と同じほどふんだんに繁っており、下生えというよりも小さな樹木に成長している。

つる性の植物は、比較的少ないが、アジサイはたくさんあり、最も高い樹木の頂上まではいのぼっている。イワガラミは古い切株や低い木の幹にからまっているのが普通に見られ、ムベはめずらしい方で、ツタウルシはロープのように太いつるでかなり一般的に見かける。キツタの類は深山では見かけなかったが、草原地帯をすぎてもない登り道ではしばしば見かけた。森林床土および木の幹には驚くほど豊富な隠花植物相が見られた。他の国の何処にあつても、中国西部

(*) 原文のママ
正しくは1935m

の有名なオメイ山にあつてさへも、この種の植物のこれほどの富にはお目にかかれなかつた。シダ類、特にコケシノブ属が実に変化に富みながら、花崗岩や木の幹、腐った切株や丸太の上に、蘚類、苔類、地衣類、キノコ類などと共に、際限もなく変化に富んだ姿形で生えている。顕花性の草本はとほしいが、奔流沿いや奔流中にある大丸石にはヤクシマシヨウマが多い。山の斜面は非常に急峻で花崗岩のかたまりがお互いに雑然と重なり合っている。あちこちに明るい黄色の粘土が見えるが、森林床土は主として腐植質から成っている。至る所に濃密な原初の森が続き、空地はない。植相を概観すれば、広大な常緑樹の天蓋の下に、そこばくの灌木の低い繁みを伴った、まったくすばらしい隠花植物の王国である。私にとって日本における最も興味深い、また注目すべき森林は、スギがそこに南の故郷を持つているこの屋久島の森林である。

私が訪ねた森の部分にあつては、今もって伐採は全くされていらない。であるからして何らかの特別の方法をとらぬ限りは、海岸地帯の民家まで風倒木を運び出すという事は不可能に近い。倒れた木はその場で平木（屋根板）にされ、人間の背に負われて運ばれる。それが現在なされていることのすべてである。昔からこの島の森は知られており、寺院の柱や用材のための丸太は、朝鮮、支那、およびその他の東方の国々にまで輸出されたものだった。このスギはヤクスギと呼ばれ、日本国中に名声をはせている。ヤクスギの材は、帝国内の他のどの産地から来るスギよりも市場で高値を呼ぶのである。

今まで屋久島の森について述べて来たことから、ヤクスギは豊かな土壌、良好な排水と多量の降雨を楽しんでいることが判明するだろう。屋久島においては、スギはその西側および北側の斜面において豊富である。最も樹高の高いものは約四十メートル、平均樹高三十メートルから三十五メートルの間である。殆どの老樹はその樹頂をもぎとられており、時々私が認めた所では新しい枝がそこに伸びていた。樹高は比較的低いと言えるが、注目に値するほどに平均している。これについては強い風の影響であろうと結論している。この森に生育しているスギの胴まわり平均値は大体六メートルから八メートルである。私が測定したものの内最大のもの、胴まわり十メートルであった。枯死し腐りつつある切株については、数度におよび十六メートルから十八メートルを測定した。幹は完全に垂直で、根幹に支えられ、少なくとも樹高の半分までは枝がない。樹皮は赤味がかつた褐色で、日光にさらされた部分は灰色がかつてくる。樹皮の厚さは二・五センチ以上になることはなく、一・五センチに達することも稀である。浅く割れ目が走り、強硬であるが、明らかにうすく細い破片となつて皮むけがする。

枝は比較的細く、水平に伸び、長さ六メートルを越えることは稀であり、多かれ少なかれ濃く繁つた長円形の山なり状を形成する。弱い内側の小枝は、セコイアデンドロンのそれと同様に脱落する。実際、ヤクスギとセコイアデンドロンの二種の木は、その見た目や全般的な性質において互いに非常によく似ている。ヤクスギの木質部は芳香を放ち、うす茶色、時には赤味を帯びてくることもある。木目にはしばしば美しいしまよがりがあり、そのような材は家の飾りや家具用として特別の高値を呼ぶ。木質が湿気の多い気候に耐えられるという証拠は、森の所々に散在している風倒木の状態を観察することによつて得られる。この樹は、森の人々が言うには八十年前から倒れているにもかかわらず、こけむした外皮の四五センチ以下にあつては、完全に健康な木質を保ちつづけていた。倒れた幹や腐った切株の上には、二代目のヤクスギが小さい苗木から高さ二十六メートル、胴まわり六メートルの太木に至るまでの範囲で成長している。スギは吸枝やひこばえを出さず、ただ種子のみによつて世代交代をする植物である。森林床土からは、スギの新しい芽生えは見られない。それは多分、周囲の元気のよい樹々との生存競争にうち勝つ見込みがないからである。それ故に、私はただ倒れた木の上とか古い切株の上のみスギが人間の助力を待たずに自己再生しているのを見るのである。倒れた丸太や切株ごとにもヤマグルマの実生が、スギの実生と相伴つて芽生えているのが見られる。この森においては、この二種の木はお互いに奇妙に好き合っているかの如くに観察された。この二種の木は、同じ古い死んだ切株や幹の上で、近くにそびえる杉の巨木によつて風や嵐から保護されるから、お互いに相擁し合つて成長している。屋久島にあつては、スギはそれのみの純粋林は形成せず、常に他の針葉樹および双子葉樹と共に成長しているのが見られるが、それでもスギがこの森における代表的樹木であることには変りはない。ヤクスギの成長高度範囲は海拔百五十メートルから千九百メートルであるが、六百メートルから千二百メートルの範囲が最適のように思われる。

スギは、日本にあつては記憶もどかぬ昔から植樹されて来ており、一般的な使用価値があり人々に親しまれてきた樹木である。自生という点に関してその明白さに疑う余地のない屋久島の森を離れてみると、日本の他のどの地方に完全に野生状態と言えぬ杉山があるかということは、仲々難しい所である。日本人自身は、四国の土佐地方の山々、および本州の北方、秋田県の北の果てにそれがあると考えているが、この意見を疑う余地は実際には存在しない。土佐では私はその杉山を訪ねる時間を持たなかつたが、羽後地方（秋田県）のそれは訪ねることが出来た。そして私が判断する限りにおいて、その森は自然林であつた。一九〇四年

にこれらの森に入り、その記録を書いたエルヴス氏の意見も私のものと同じである。この羽後の森は、屋久島の森から千五百マイル北方、土佐の森から九百マイル北方に位置している。それだけにスギの原生林分布は、非常に注目し値するものである。羽後の森は三百年以上も昔から知られており、以前は現在の規模よりずっと広大な地域に渡っていたという。この森の南部及び中央部分にあつては、純粋な杉林が形成されているが、北部にあつては、ヒノキアスナロと混生しており、もっと北に行くに従つてこのヒノキアスナロの純粋林へと道をゆずつて行くのである。スギが自生している全地域面積は、約二十五平方マイルにおよぶと言われている。大館地方だけで千五百エーカーばかりの自生地があり一九一四年現在において、過去八年間にわたり毎年百万ドルの価値の杉材を産出していることを告げられた。山の傾斜は険しく、高度は約三百メートルで、土壌は火山灰、小砂、軽石その他である。スギは山々の斜面や谷合いに濃密に群生し、樹高平均三十〜四十メートル、幹の胸まわり平均二メートル〜三・五メートル、最大のもので樹高六十メートル、幹の胸まわり五〜六メートルと言われている。心材は赤色そのもので、用材として特別に良質である。この地方の谷の一つであるナガキ沢は天然記念物として国家によって保存されている。記録に値する点のひとつは、これら北方の森に自生するスギは、屋久島のそれにくらべて丈はより高く成長し、幹のまわりは細いということである。

クリプトメリア、即ち日本名によるスギは、日本の針葉樹の内最も高貴なものであり、日本における多くの名所旧跡は、印象的なこの木の威厳ある並木や小さな森に、その魅力の大部分を負うているということが出来る。天上へ突き伸びる完全に垂直な幹、暗緑色の円錐形の樹冠・スギには莊嚴さと尊嚴さがある故に、寺院や神社等の聖なる場所に植えられる木として一般にふさわしいものとされている。誰でも知っている有名な日光の杉並木は、財政の貧しい一大名のささやかな献上品だつたそうだが、徳川家康を記念して造営されたあらゆる記念建造物の内で最も莊嚴なものとなつている。これほど著名ではないが、日光のものより大きな形の並木や木立が日本の各地にたくさんある。伊勢の神宮にはすばらしい老木があるとのことであるが、私はこの有名な場所を訪れなかつた。私が見たうちで最も素晴しかったのは、そして恐らくは日本中で最大であろうと思われたのは、四国の土佐地方の杉村のお寺の庭にあつたものである。そのスギは高さ五十メートル幹まわり二十五メートルを記録した。その木は完全な健康木であるが、頂上の方は嵐で折れてしまつたそうである。折れる以前はなおその上になつたり十五メートルの高さがあつたそうである。九州の大隅地方のサノにある初代天皇

神武帝を祭つた神社には、約五百年以前に植えられたという素晴らしいスギの並木道がある。樹高は五十〜六十メートル、幹まわり三〜六メートルである。奈良の春日山には高さ四十〜五十メートル、幹まわり十〜十二メートルのスギの木立がある。奈良の寺院や公園には、数多くの目を見張るようなスギ古木がある。私が見た内で最も素晴らしい杉並木は、大和と紀伊地方の境にある高野山のものである。それは約六五十年前にオゴ上人と呼ばれる一僧侶によつて植えられたものである。この並木は一マイル以上も続き、樹高は四十〜六十メートル、幹まわり四〜八メートルもあり、私はかのエルヴス氏が「世界中で、人の手によつて植えられたいかなる他の樹木よりも、その莊嚴さにおいて優れている」と述べた言葉をそのまま信じていることが出来る。前に私は、ヤマグルマとスギの奇妙な共同関係について述べたが、この並木や森林にあつては、他の針葉樹や広葉樹でさえも、明らかに完全に健康な生きていくスギの上根に根づき、成長しているのを見るのは、決して珍しいことではなかつた。日光の二荒神社の入口の所にあるスギには、地上約四メートルの位置から幹まわりにして一メートルはあろうというコナラが生え出しているのが見られ、ちよつと見るとスギの木の枝のようである。ドンナラが落ちた時にどんな穴があつたにせよ今では完全にふさがれていて、そのコナラの上にも下にも、わずかなふくらみさえ認めることが出来ない。杉の木は朽ちていくことが多いので、コナラの根はそこに根づいてやがて地上に達したのだろう。杉が寄生木の宿主の役ばかりではなく自ら寄生する役を演ずることも出来るという実例が奈良にあるが、そこでは高さ十八メートル幹まわり五メートルのイブキの側面から、高さ二十五メートル幹まわり一メートル以上のスギの木が生え出している。森にあつても並木にあつても、スギは互いに非常に密接して植えられている。その結果、時がたつにつれて大きな根元の部分がくつき合つてしまひ、おかしな樽のような形になり、共通の株から巨大な幹が生い繁つていくかのような印象を与える。杉は吸枝もヒコバエも出さず、それが育つて偶生することもありえないので、この印象は完全な誤りであることは言うまでもない。日光の杉並木はこの現象を大変よく現している。もうひとつ興味ある点をあげれば、植林されたスギの平均樹高は、森林の天然のスギよりも優る、ということである。用材としてのスギは、ヒノキに劣るけれども、ヒノキより一般的に使用され、大量に産出されるので値段も安い。スギは建築材一般に使用され、酒樽用として特別な価値がある。特別美しい木目の材も、色々な用途に合わせ使用される。天井板、衝立、戸板、家庭調度品等、様々な用途に合せて使用される。スギの土埋木は日本の多くの地方で見出されるが、伊勢、駿河、相模、陸前に特

に多く、その材は美しい暗い色合をしており、これらの地方にあつては家具や調度品用としての誉が高い。

スギは日本の大部分の地域で植栽に適しており、その故にすべての樹種の中で最も広く再植林されている。帝國政府によると民間人によるとを問わず、九州の南から本土の北の果てまで、所を選ばず遠い昔から何百万人という人々によって植えられてきた。北海道においても函館周辺でこの木の植林が試みられて来たが、その地にあつては氣候はやはりいささか厳しすぎるようである。スギは枝の切口から容易に根付くので、以前は挿木による繁殖方法が一般的な森林作業法として採用されていた。中指の太さくらいの三十五センチほどの枝を谷合いや丘陵地帯に密接して挿木する。季節は晩秋、冬、初春等その地の氣候に準じる。年月と共にそれは根付いて成長し、やがて新しい森林を形成するのである。今日の国有林にあつては、この方法は棄てられ実生苗が採用されている。その理由は、実生の方がより早くより良質の木の成長を見るからであるが、最初のコストは挿木に比べて高くつくことは否めない。材木として或いは並木や木立としての使い道とは別に、杉は日本庭園に多く植えられており、様々なめずらしい型に仕立てあげられている。わけても生垣用として、密に植えられて成功している例がはなはだ多い。

一般論としては、その素敵な標本が数えるほどしか知られていない西洋世界にあつては、スギは植林できないと言えるかも知れないが、一八四二年にはすでに英国に紹介されているものである。北アメリカ州東部にあつては、ポストンのような北方に比べれば条件は悪く、全く困難がないわけではないが、当地の植物園において保護処置の元に生存させ得ている。私は羽後地方の森林からスギの種子を入手したが、我々が現在試みている樹木の成育に比べて一段と困難に思われるこの実からの芽生えが、成功するかどうかを見守ることは興味深いことである。

私がよく訪ねる支那のある地方では、スギは寺院や神社の近くに植えられているのを時々見かけるけれども、ヘンリー氏の場合と同様私もこの木の自然生は、支那にあつてはかつて見たことがない。フォーチュン氏は、一八五七年刊の「支那人と共に住んで」の中で、ニンポの南西地方の山に自然生のスギがあることを述べており、フランチュット氏はデイヴィッドの論文を引用して、スギの木は支那において野生しているが、福建地方の山々では非常にめずらしいものになりつつあると結論している。それにしても、スギの原生地が支那かどこか、日本以外の地であるということを確認な事実として認定するためには、その前に更に証拠が欲しいものである。

スギは一六九〇年一六九二年の間に、ケンペルによって日本において最初に

発見されている。彼の著した「異国見聞録」(一七二二年刊)の中で、彼はスギという日本名によってこの樹についての短い説明をしている。一七〇一年に、ジェームズ・カニングが支那の上海近くにある舟山群島において、スギが自生しているのを発見しており、その標本のひとつはプラクネットによって、(*Cupressus cheusanensis*, *juniperinus arcuatis foliis*) の名によって図示されている(一七〇五年)。スギは十九世紀の始めにオランダ人によってジャワ島に紹介され、ヨーロッパにはシベリアからペトログラードの陸路経由で最初にもたらされたと言われている。一八四二年にエヴァラード・ホーチ氏によって舟山群島からロンドン郊外のキューヘ種子が送られ、その種子は芽生えたことが知られている。一八四四年には、ロバート・フォーチュンが上海から取り寄せた大量の種子によって、英国の王室園芸協会にこの樹を紹介している。支那から到来したこの変種は庭園ではカワイイスギとして知られているが、日本種のものに比べて栽培成功率は低い。日本種のもは一般に庭園家の間では *Lodhi* *Cari* 変種の名で知られており、シーボルトが日本に住んでいた間にジャワのブイテンゾルグ植物園に送られ、ブイテンゾルグからトーマス・ロップがそれを一八四五、六年頃にヴァイチ氏らに送ったもので、植栽された最初のもは、この種のスギである。すでに言いつくされているように、数多くの種類のスギが日本において発見されて来ているが、これらの内最も特徴的なものはヤワラスギ (*degeans Mast.*) であり、英国へはジョン・ガウルト・ヴァイチによって一八六一年に紹介され、アメリカへはジョージ・H・ホール博士によって一八六二年に紹介されている。スギのこの変種は、まっすぐで先が尖っていて、広がっているか鎌のように曲がっているかしている葉をもっており、細い水平な枝を持ち、小枝はその先端で再曲している。若芽の時は葉は明るい緑色であるが、秋から冬にかけて青銅色をおびた赤色に変化する。この時期に風変りな美しさを示す。私は日本においてこの木を数多く見、九州の数ある地方ではそれが生垣として使われているものも見たが、その原生については何も知ることが出来なかつた。シーボルトは、それは支那から来たと言っているが、私の思うにそれは疑わしい気がする。ヤワラスギは、シーボルトによって日本からブイテンゾルグへ一八二六年から一八三〇年にかけて送られたものである。日本にはヤワラスギ (*degeans nana Hort.*) の名で知られている。矮性のものが栽培されている。日本ではまた、庭木用として矮形のもの、しだれるもの、黄と白のまじり合った葉のもの等、スギの原形から見れば大変異状な形のもがある。その中には長くしだれかかった非常によく伸びる小枝と下向きに垂れる枝とを持つている種類のもの (南洋スギ・*var. araucarioides Hort.*) も含まれている。